

青春スクロール

母校群像記



はくよう
県立柏陽高校 10

理科の授業「未知」への扉



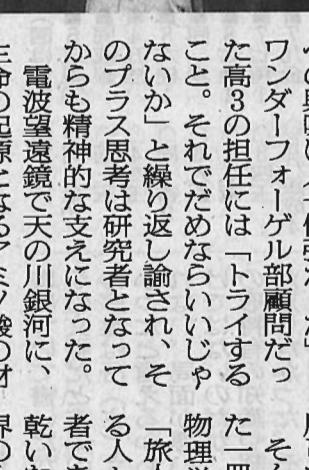
「人工知能を持つ実験ロボットの導入に取り組む東大大学院教授」元東工大教授の杉太郎



「中3から高1になった86～87年にかけ、「高温超電導」が世界的なブームになった。電気が抵す」と在校生に呼び掛けた。



「「人生の岐路には『恩師』がいる。自分で教えを請うのが肝心です」と話す越川



「「記憶力やテクニックに頼った勉強法では発想力は培われない」と話す一杉

「「人生の岐路には『恩師』がいる。自分で教えを請うのが肝心です」と話す越川

「好きな数学は先取り学習で進めていた斎藤

柏陽高は、文部科学省のスイー旬、母校であった出前講座「東大イン柏陽高」で講師役を務めた。「もっとがっていい。他の人と違った考え方こそ大切です」と在校生に呼び掛けた。

（50、1990年卒）は7月上旬、母校であった出前講座「東

大イン柏陽高」で講師役を務めた。「もっとがっていい。

他の人と違った考え方こそ大切です」と在校生に呼び掛けた。

（50、1990年卒）は7月上旬、母校であった出前講座「東

だ。「宇宙からの帰還」（立花隆著）は最も好奇心をかき立てた1冊。「宇宙から自然のままの地球を見ていると、国境といふものがいかに不自然で人為的なものであるかがよくわかる」といつたぐだりに「世の中を見

る目が一変した」。科学技術の未来への可能性を改めて感じた杉は、照準を理系に合わせ、東大理科一類に進学した。肝がんの新たな腫瘍マーカーを発見した東工大教授の越川直

彦（57、84年卒）は、昨年の出前講座で講演した。専門のがん早期発見の最先端医学を紹介し、後輩たちに「やりたいことをことん突き詰めて」とエー

高校では野球部に所属。最後の夏の大会直前に、体育の授業で左ひじを剝離骨折し、絶望の淵に。だが「絶対に間に合う」と信じ、片手で素振りを続け、本番で適時三塁打を放った。一方で、自意識が強い性格から人に合わせるのを嫌い、集合写真にもあえて写らないようなうつ屈した一面もあった。

そんな気持ちを解放してくれた一冊の本があった。ノーベル物理学賞の湯川秀樹が書いた「旅人」。未知の世界を探求する人々は、地図を持たない旅行者である——など言葉の数々が乾いた心を潤した。「物理の世界の入り口にもなったバイブルです」

II 敬称略